學界展望

日米の宗教學

北川三夫

日米の宗教學についての私見をのべるにあたり、先づ昨年の國際宗教學宗教史會議について日本側の準備委員會のなされた大きな貢献に心からのお禮を申上げたいと思ふ。この大會を通じて、日米だけでなく、日本と世界の宗教學界の交流がいよいよ密接になることは明かである。この機會に現今世界の宗教學の流れ、又それに對して日米の宗教學の果すべき役割等について考へることも無駄でないと思はれる次第である。

一

宗教學（Allgemeine Religionswissenschaft）が世界第二大戰を契機として新しい方向に進み出したと云ふことはよくきくことであるが、それが如何なる内容をもち意味をもつかと云ふことについて考へてみる必要がある。それ以前から、宗教學の沒落を云ふ人々もないではなかつた。それには、歐州第一大戰で有能な若い宗教學者が戰場の露と消えたこと、リベラリズムが下火になつて、それと共に單純な比較宗教學が勢力を失つたこと等がよく擧げられる。一九三〇年代は、イタリアのエチオピア出征、東洋における滿州事變及び日支事變、ヒットラーの中歐占領等、血なまぐさい時期であり、宗教學の發展には好ましからざる狀勢であつた。世界は戰火に蔽はれ、宗教學者は僅かに出版物によつて他國の學者の勞作をうかがひ得たにすぎないのであつた。

かうした十年の困難な時期を經て、戰後始めての世界宗教學會議（The 7th Congress of History of Religions）がアムステルダムに開かれ、日本からも古野清人教授が出席された。此のコングレスは戰後始めての宗教

學者の顔合せと云ふだけでなく、いろいろの意味で大切な會議であつた。その開會演說に於て、時の President であつた故ヴァン　ダー　レーウー (G. Van der Leeuw) は、"The Actual Situation of the History of Religions" と云ふ題で次のことを語つたのである。彼によれば、今日と將來の宗教學は二つの重要な問題に心しなければならぬ。卽ち、第一に、宗教學と Theology (神學) との間に相互の諒解と友好的關係がなければならぬ、第二に、宗教學は哲學、考古學、人類學、文化學、心理學、社會學等の學問と密接な關係をもちながら自らの學問的方向を展開しなければならぬ、言ひかへれば、宗教學の新しい行き方はいろいろな方面から一つの問題を取扱ふことであり、かゝる勞作は諸種の學問に從事する學者の協力なくしては不可能なのであると。殘念なことに Van der Leeuw は第七回コングレス後まもなくなくなつたが、彼の云つたことは今日宗教學に從事する者が今一度味合はねばならぬ問題であると云つてよい。

宗教學は、その中に異つた次元を含み、しかもそれらが綜合的な研究をすると云ふこの新しい行き方は、第二大戰後の顯著な特徵であると云へるであらう。アムステルダムに開かれた第七回のコングレスの中心課題は「文明における mythical-ritual pattern」であり、ローマに於ける第八回のコングレスはその延長とも考へられる kingship を中心課題とした。又、昨年の夏東京に開かれた第九回のコングレスが「過去および現在における東洋の宗教」を主題としたことは周知の事實である。ローマの會議については宮本、菅兩博士のくはしい報告があり、今度の會議については今語る必要も認められないが、アムステルダムの會議のことを今一度想ひ起すのも無意味ではないと思はれる。

アムステルダムに於ても、他の場合と同じ樣に、會議は「未開宗教」「古代宗教」「インド」その他の部分に分けられ、それぞれ專門の學者の研究發表があつた。それは單に異つた文明における myth と ritual の研究がどこまで進んだかと云ふだけの問題ではなく、かうした異つた時代、異つた文明に關する研究によつて「文明そのもの」と、mythical-ritual pattern との關係のあり方についての綜合的な、また組織的な探究をないがしろに出來ぬと云ふ主旨であつた。その意味で、アムステルダムのコングレスはこれからの宗教學のあり方について大きな暗示を投げかけたと云ひ得るであらう。

今此處で第七回コングレスの內容を細かく再吟味することは出來ないが、文明と mythical-ritual pattern の問題を取上げた理由は、何處の社會、文化にも、ほり下

げてみればある種のGestaltがあり、それに又mythical-ritual pattern（この場合mythical-ritualといふ語は神話的、祭祀的と云ふ言葉よりは今少し内容があるのだが）と直接間接の關聯をもつと云ふ前提にもとづいてゐる。卽ち、ある特定の社會をみると、その大部分の人々が意識するとせざるとにかゝわらず、ある種のbehavior pattenが受容されている。日本に於て疊の上でキチンと正坐し、他人に會ふ時に腰から深い禮をする等の外面的な事柄は勿論のこと、又、危機に際した時の身の處し方についても日本人獨特のbehavior patternがみられるであらう。その裏には義理、人情と云ふ樣な傳統的な考へ方があり、それは一時的に發生したものではなく、さかのぼれば歷史意識以前の神話的信仰にも一脈通ずるものがある。これによつても明らかである樣に、文化とか文明とか云はれるものは生きた有機體であるから、風土的地理的な條件や外からの影響を無視出來ないけれども、內面的な構造のあることを忘れてはならぬ。時代の推移と共に人々のbehavior patternは變り、神話的なものが合理的なideologyに變るではあらうが、その兩者の內面的な關係が切斷されることはない。アムステルダムのコングレスが問題としたのはかうした外面的なものと內面的なものとのつながり方、卽ちmythical pattern とritual patternとの「粘着性」であり、それを探究することによつて「文明」と「宗教」との關係を考察しようとしたのであつた。

二

周知の如く、mythical-ritual patternが切れ目のない（seamlessness）形でみられるのは未開社會である。未開人は祭祀こそ彼らの集團とその中の個人の生存の爲に不可缺であると考へた。それらは單に何人かの人々が好ましいと考へてつくり上げた形式的な儀禮ではなく、その祭祀はmythによつて指示され、權威づけられてゐると考へられた。未開社會のmythは未開人の生存について重大な宗教的意義をもつ特定のeventに關する民族的なmemoryなのである。そのmythを語ること、聞くことによつて、有史以前の理想的な狀態をうかがひ知ることが出來る。云ひかへれば、mythと祭祀によつて現在と本來あるべき姿（それが原始的なeventsとして表現せられてゐる）との結びつきを實現することが出來ると信じられた。未開社會に於ては個人のlife cycleと彼の屬するcommunityのcycleとがRites de passageによつて關係づけられてゐる。それ故に、未開人のcommunityは同時に又宗教的集團でもあつた。であるから、

宗教學者が未開人の宗教の性格を探究しようとする場合、その mythical-ritual pattern を學ぶべきであり、それはとりも直さず未開人の community 全體を研究することなのである。

未開社會、原始宗教の場合には多くの宗教學者も人類學者も上記の様な mythical-ritual pattern があると考へる。しかし歴史をもつ社會になると話が複雜となる。古代(Antiquity)宗教と文化との關係については、著名な近東古代學者、故 H. Frankfurt 等はさうした pattern を推定することは不可能であり、危險であると主張してゐた。これに反して、同じく近東古代學者の中でも mythical-ritual pattern があると考へる人達は、古代近東の祭祀を毎年くりかへされるものと特別な必要に應じて行はれるものとに區別はするが、その兩者とその背後にあるmyth又は集團との關係について或る種の pattern を見出すことは不可能でないと主張する。

更に下つてギリシャ　ローマの古典文明になると學者の間には百論百出で意見の一致をみない。或る特定の myth と或る祭祀との內面的關係を肯定する學者は多いが、全體的な意味で mythical-ritual pattern の存在については諸種の問題が殘されてゐる。インドや中國の古代文明については cosmogonic myth や諸種の祭祀についての研究はあるが、全般的な立場から pattern を見出すか否かについてはまだまだこれからと云ふ感じがする。又、こと東洋となるとヨーロッパの學者の中には學派があつて、それぞれ著名な開拓的時代の學者の所說が根强く傳承されてゐる。東洋人の學者の間にもヨーロッパ諸學派の影響は强く、これらの視野から東洋の myth や祭祀を研究する傾向が案外强い様に思はれる。でなければ、自分の國の文化を克明に研究はするけれども、世界的な宗教學界に通用する framework に連結することの少い行き方になり易い。此處にも大きな問題が殘されてゐる様である。

アムステルダムのコングレスは mythical-ritual pattern を取扱ふにあたり、年々くり返されるものに重點をおきすぎた感がある。勿論古代から今日まで傳承された myth や祭祀の重要さは云ふ迄もないことであるが、さうした mythical-ritual pattern の時代的展開と云ふことも見逃してはならぬ。例へば、古代ペルシャに於ては動物や人間を犧牲にすることが普通とされてゐたが、ゾロアスターの出現以來火の禮拜だけが重んじられた。そこにゾロアスター以前と以後のペルシャ文明に切斷性があるか？　連續性があるか？　の問題がある。若し後者をとれば如何なる意味で pattern の連續性を解すべき

かと云ふ様な問題が提示される。これと同じ様な問題がインド文明に於ける佛教、アラビア文明に於けるイスラム教等に關しても考へられるのである。古代イスラエルについても、Ivan Engnell 等はモーゼ以前の Paesah-Massot を近東古代に廣く行はれた自然祭祀であると解釋し、この祭祀の發展を五期にわけて研究してゐる。

宗教學者が mythical-ritual pattern を問題にするとき必然的に起つてくるのは二つ以上の文明が何らかの形で交錯する場合である。例へば、砂漠のヘブル民族が農耕生活をしてゐたカナンの住民の間に侵入した場合、或ひはインドアーリャン民族が土着のドラヴィディアン族の間に入つた場合等、異つたmythical-ritual patternが交錯したのであつた。又、地中海沿岸に於てギリシャ文明とユダヤ教、キリスト教及びイスラム教が結びついた時にも同じ様な問題が殘される。かうした問題を單に syncretism と云ふカテゴリーで片づけてしまふことは出來ないであらう。

アムステルダムでは以上の様な問題が異つた立場から專門家によつて討議せられた。しかし、準備委員達が希望してゐた様な全般的な「文明そのもの」と mythical-ritual pattern との關係をハッキリさせることは不可能であつた。ただ、何れの宗教にも typical な性格があり、それにまつはる人間の behavior pattern や宇宙の絶對者に對する態度のあること、それらと文明との間には內面的な關係が考へられると云つた様な一般論に終つてしまつた。殊に、pattern と云ふ語にはいろいろの意見が出て、異つた宗教、文明に於ては pattern は又異つた structure と構成要素をもつと云ふことも明らかになつた。それでローマのコングレスに於ては、各文明に存在する重要な一問題について討議することとなり、kingship が取上げられたのであつた。それは王と云ふ制度の研究だけではなく、如何に文明と mythical-ritual pattern との關係が kingship を中心として理解されるかと云ふことに焦點がおかれたのであつた。

三

かうした背景を考へると、今度東京に開かれた第九回のコングレスが「過去及び現在における東洋の宗教」を主題としたことは大變有意義であつた。前記の如く、アムステルダムに於ては文明と mythical-ritual pattern と云ふ新問題を呈示し、ローマに於ては各文明に共通な kingship なる一制度とその背後に横たはる觀念とを中心に文明と宗教との關係を考究し、東京に於ては問題を地

理的に區切つて東洋の宗教に重點をおいたのであつた。東京のコングレスに於ても、大切なことは、如何なる專門家がどんな新研究を發表したかと云ふこともさることながら、戰後の世界宗教學界の行き方である宗教と文明、文化との各次元を通じての關係（multi-dimensional relationship）について如何なる全體的な貢獻をしたかと云ふことを考究しなければならぬのであらう。かうしたコングレスは諸種の副產物的な貢獻もし、刺戟も與へるが、コングレスの宗教學的意義をハッキリと認識し、これに向つて今後の思索、研究をするか否かによつて、世界宗教學界の歷史の一ページとしての東京のコングレスの重要さが決定されるのではあるまいか。

と云ふことは、コングレスの終了を以て凡てが完了したのではないと云ふことである。コングレスそのものゝ組織、運營に關する絕大な讃辭については海外からの代表者が等しく一致する所であるが、それは同時に日本の宗教學界の將來に對する大きな期待であることを附記しなければならぬ。あれだけの大會議を組織した日本の宗教學界と、それに參加した海外の代表者は、これを機として世界の宗教學の發展の爲により一層の努力をしなければならぬのである。これに關して痛切に感ずることは、今迄宗教學は餘りにもヨーロッパ中心であつたと云ふことである。それは單にヨーロッパ諸國に於て宗教學が廣く認められ、多くの學者がゐたと云ふだけではない。宗教學そのものゝ目的、性格、研究方法等がヨーロッパ式に理解されることを當然として受け入れられてきたと云ふことである。宗教學が哲學や神學から獨立したのはヨーロッパに於てゞあり、開拓期の宗教學がヨーロッパ文化のethosを反映したことは當然と云へるであらう。しかし、宗教學はカン詰めにして他國へ賣り込む性質のものでなく、各地域の文化と宗教との連結によつてガッチリと根を生やし、又進展しなければならぬのである。この點に於て、今迄ヨーロッパ依存主義の爲か空スベリの傾向のあつた米國の宗教學界と、今度の會議を機として大きく浮び上つた日本の宗教學界との、世界の宗教學に對する義務も又大きいと云はねばならぬ。勿論、日本や米國に於て、ヨーロッパのそれと別種類の宗教學が生れると云ふのではない。しかし、各地に於て宗教學が少しづゝ異つた視野から檢討され、異つた分子（ingredient）が入ることは止むを得ないだけでなく、望ましいことである。結論を云へば、全世界の宗教學が今迄の樣にヨーロッパ式一色で進展すべきではなく、ヨーロッパ、東洋、北米と云ふ三地域にそれぞれ、同じ目的と方法論に立ちながら地方色を加味した宗教學の三傾向が確立され、三

者の相互の啓發と協力と云ふ形に於て世界の宗教學全體が展開しなければならぬと信ずる次第である。

各地域の宗教學が確立し、しかも世界的なつながりを持續すると云ふことは云ひ易くして行ひ難いことではある。これに關して前記 Van der Leeuw の言葉が意義深く憶ひ出される。彼によれば、これらの宗教學は、一方に於て theology（これは狹い意味での西洋に於ける神學だけでなく、あらゆる宗教の「中から」の學問、卽ち教學、護教學等をも含める）との關係を維持しなければならず、他方に於ては他の文化、人文、社會科學一般との關係を無視しては宗教學自身の發展を望めないと云ふにあつた。今日米國の宗教學がこれらの問題に直面してゐることは別稿に記した。（Cf. 米國宗教學の展望）これにはいろいろ複雜な問題がこれからの日本の宗教學の前に横たわつてゐることも十分に想像される。西洋に於ては（米國をも含めて）哲學と宗教とが異つた基盤の上に立つてゐて、兩者の關係、及び宗教と他の學問との關係が對照的であるだけに、一面問題が明かであるとも云へる。東洋に於ては異つた宗教が同じ地域に併存することはあるが、宗教と哲學とは全然異つた基盤から發生してゐない爲に、兩者の關係は對照的に考へられず、爲にかへつて宗教と他の學問との關係を組織的に考へることは至難であるとも考へられる。

少くとも今度の東京のコングレスで目立つたことは、東洋諸國に於ては宗教學が宗教を宗教的に學ぶ教學から獨立してゐないと云ふことである。イズラム圏の諸國、インド、東南アジア、中國に秀れた學者が宗教の研究をしてゐないと云ふのではない。けれども、日本を例外として、他の東洋諸國では宗教の研究は宗教、又は哲學の立場から、或ひは社會、人文の學問的視野からそれぞれなされてゐるだけで、宗教學的（religio-scientific）な立場からなされることが少いのである。これらの東洋諸國の學者達と協力しながら、東洋に於て宗教學を展開させ、もつて全世界の宗教學の發展に貢献することこそ、日本の宗教學界の擔ふべき責任であり、役割であると考へられる次第である。

（了）

（著者　シカゴ大學〔宗教學〕教授）